

大阪大学リーダーシップ教育研究会 第 11 回会合 正式議事録

文責：大阪大学大学院国際公共政策研究科  
博士前期課程 1 年 西嶋聡

【日時】 2010 年 6 月 28 日(月) 13 時 00 分～15 時 00 分

【場所】 大阪大学豊中キャンパス OSIPP 棟 6 階 プロジェクト研究室

【内容】

1. 報告

●テーマ 『大学における教育または研究を動かしている問題意識』

●報告者 福澤一吉先生（早稲田大学文学学術院・教授）

2. GLEA セミナーについて

3. その他

【参加者】（五十音順・敬称略）

大澤 恒夫（弁護士・大阪大学大学院国際公共政策研究科 客員教授）、木川田 一  
榮（大学教育実践センター教育実践研究部キャリア教育支援部門教授）、野村 美  
明（大阪大学大学院国際公共政策研究科、高等司法研究科教授）、平井 啓（大阪  
大学コミュニケーションデザイン・センター、大阪大学大学院人間科学研究科/医  
学系研究科助教）、大和谷 厚（大阪大学・医学部保健学科教授）、和住 麻矢（株  
式会社ポラリス・セレクタリーズ・オフィス 代表取締役）

.....  
1. 報告

●テーマ 『大学における教育または研究を動かしている問題意識』

●報告者 福澤一吉先生（早稲田大学文学学術院・教授）

本日の発表では、野村先生からの提案のうち

①『大学における教育または研究を動かしている問題意識』を取り上げる。

・大学における研究の問題意識の中心

「様々なことに問題意識を持って、その問題に解答が出せる程度までその問題を分解し、その分解された問題に自分なりの結論を出す」

→仮説の検討を論証ベースでできる学生の養成

・学生は学部で何を学ぶのか

→卒業後数年したら何も覚えていないのではないか

覚えてほしいポイント 4 点（コンテンツ・フリー）（→資料参照）

- ・北大の経済学部の場合  
高校時代に丸々一冊本を読んだことのない学生が入学  
**大学レベルの教育を施す以前のレベルの問題があまりにも多い**  
学部一年生に対して学問というゲームを楽しむためのベーシックなルールとはなにかを教える →基礎演習クラス

◆基礎演習クラス

- ・高校までの勉強と大学からの勉強は何が違うのか。  
高校まで：すでに establish された知識を頭に入れる  
大学以降：新たな「知の創造」
- ・問題意識とは何か、  
世の中に対する疑問を書かせてみる（3 ページ目、資料②）  
実態調査型（…はどうなっているのか）と仮説論証型（なぜ…は～なのか）  
後者は自分で答えを考えるしかない  
→なんとなく考えた問題は、答えを探すと非常に大変だということを実感させる  
しかし、学生は質問は答えとペアとなっているという固定概念をもっており、答えを追求し続けることに辛抱できない。

◆論理と論証

- ・論理とは(資料参照)
- ・論証とは  
日本人学生は論証が非常に弱い(論証とは何かがわかっていない)  
例) 事実で答える習慣 (理由を問われているのに事実で答える)  
「彼女はなぜ来られないのか?」「風邪だそうです。」  
→裏に何らかの仮定がないと答えになっていない。  
→トゥールミンの議論モデルの活用 (根拠、論拠、主張)  
文章を読ませ、「A だから B」という構造がどこに埋まっているのかを見つけさせる。  
→日本語で書かれた文章は論理的に書かれていないことがわかる
- ・根拠と論拠の関係性  
根拠と論拠の役割は違う  
「あなたの主張結論には何か具体的な裏づけがありますか」  
と聞かれたときに出すのが**根拠**。  
つまり、形としては経験的な事実に対応しているものを出さなければいけない  
しかし、それだけでは不十分だとトゥールミンは考えた  
「なぜこの経験的事実を出すと主張が通るとあなたは考えるのですか」

と聞かれたときに出すのが**論拠**

上の例だと、「今日彼女は来ないのか」「風邪である」  
理由を聞いているのに、「風邪」という経験的事実を述べただけ。  
それにもかかわらず Aさんと Bさんの会話が成立しているのは、「風邪」と「彼女は今日ここに来ない」という結論との間を論理的に介在する何かがあり、それがここには書かれていない可能性がある。

例)

- ・人間は健康であるほうがいい
- ・病気は治すべきである
- ・安静にした方が病気は治しやすい

会話の間でこれらが介在することで、「風邪」が「彼女が来ない」ことを説明する

データをどう解釈するかが論拠の働きである(ドイツ軍の爆撃例)

根拠自体に内在する意味はなく、それをどう捉えるか。

根拠は論拠依存的。論拠はデータから独立。

- ・問いを崩すとは

サッチャーの肖像画の例

正立の場合には差が顕著であるのに、倒立にするとあまり変わらない

→腕時計だと成立・倒立でも差がない。人間の顔だけ差が顕著である。

何をどうやって調べていくとこの不思議さに到達するかは、とても長い道のりを歩まなければわからない。どこから崩したらいいのか。問いかけとしたら面白いが、解こうとすれば非常に大変。

◆大学院での取り組み(資料③, 6 ページ目)

- ・パブロフの条件付けの定式化の例

実験状態を観察後と呼ばれている言葉で記述した後に、それを理論に書き換える。すなわち、現象の記述をしてほき、その現象がなぜ起きるかという論理的仮定を列挙し、その仮定の組み合わせで現象を再構築をする。

なぜこれをするか・・・

現在は少ないが、昔は海外研究の落穂拾いの研究が多かった。

研究の行き先のわかった上での落穂拾いなので、大した業績にならないけども失敗も起きない。

→大学の教員も大学院の学生に落穂拾い型の教育をする。

世界の先端に触れられるような研究を学生にさせない。大学院で「世界で初めてしたんだ」という大学院レベルで教育をしないと縮小再生産になってしまう

## 2. ディスカッション(抜粋)

### ・「問い続けることの忍耐」という点にリーダーシップとのリンク

目の前の課題に単純に反応するのではなく、忍耐強くより適切な解を導き出していく能力が重要。ロースクールでも学生は単純な解をすぐに出したが、ブレイクダウンして全体の構造を見据えて、一つ一つ議論を積み重ねていくことを忍耐強くやる必要がある。(大澤先生)

→日本の大学は学生に対するケアが少ない。学生が消化できないままではなくクリティカルに聞いていく態度がないと、自分の中で整合性をもって取り組むようなこともない。そのようなスキルのないまま専門的な難しいことをさせている。高校と大学の教育が非連続であるように思える。(福澤先生)

### ・教育のタイミング

統合型タイプの教育は、いったん専門のわけのわからない教育を受けた後のほうがより効果的なのだろうか。(平井先生)

→両端に、つまりサンドイッチ状態にした方がいいが、後の強化(reinforcement)がない。文学部には、個人の感性の表現を均一化して教えるとは何事かという人もいる。教えたいという教員が4分の1しかいない。コマ数の少ない先生が嫌々ながら教えているというのが現状。

マイケル・サンデル先生のハーバード大のクラスにて質問をしている学生は、ハーバードに来たから質問をできるようになったのではなく、もともと質問の塊がハーバード大に行っているだけなのでは。本来私が一生懸命やろうとしていることは大学1年ではすでに遅い。ある程度臨界期を越えた学生に教育しているので、一生懸命やる割には頭に入らない。言語と同じで臨界期があり、それを逸した時期が18歳程度なのではないか。(福澤先生)

### ・日本の政治家

いま参議院選挙で演説の話を聞いていると、日本の政治家は根拠や論拠に触れず主張だけを言っている。そういうものと、リーダーシップを考える上で根拠や論拠をどうプレゼントしていくのかは関係があるのだろうか。あれはどうかならないのだろうか。(平井先生)

→政治家に基礎的なトレーニングを受けていただいでどうにかなるだろうか。  
政治家はたぶんレトリカル。「けしからん」というのが結論ではなく、それがけしからんかどうかというのは論証の対象になってなくてはならない。そこを解いてほしいのに、結論として出てきてしまう。論証ベースの丁寧なやりとりはほとんどない。(福澤先生)

・論理と論証

論証と議論は英語で考えられているのか。(野村先生)

→そうではなく、議論ということばは前から使われるが、議論とは何かということとはつかみどころがないので、それを論証という言葉に置き換えている。そうすると議論の定義が論証のストラクチャーと同じになる。つまり根拠を出して主張をし、そしてその両者が繋がっていることを論拠を出す、これが議論であるとする。それ以外の要素は議論でないと学生に教えている。(福澤先生)

→それは交渉学の議論とも同じである。裁判は、昔は原告が金払え、被告がそれを否認、そしてその理由を述べる。ある先生が、訴訟は交渉である、議論ではないと述べた。教科書では議論説と交渉説が対立している。よく読んでみると、その先生の本には交渉とは議論であると書いてある。お互い定義せずに議論するので、学説自体が全く議論になっていない。

福澤先生は議論というものを定義し、それに入らないものは議論ではないと、一つ一つ定義してここに入らないものはこうじゃないという風の場合わけしていったら本当の理論が出てくる。(野村先生)

→大学で教員が伝えなければいけないメッセージが曖昧すぎる。どのようにしたら明確になるか伝えなければ教育にならない。

ゼミでは議論のルールを学生に徹底している。議論のルールから外れたものは、議論に介入してストップさせ、初めからさせたりしている。本では中々身につかない(福澤先生)

・先生の講義では学期の最後にはどのように終わるのか(大和谷先生)

→私の介入がだんだん少なくなってきて、論証のタームでそんなに恥ずかしくなく議論し始める。ゼミではどうしても学生と私との話になる。それではまずくて、誰の発言に対して他の学生が発言しなくてはならない。最近はずこしそれが出てきている。時に大

げさにほめたりしている。(福澤先生)

→半期でそれができるのか(野村先生)

→半期ではできない。3年生が慣れていないところを4年生がカバーするような、オーバーラップみたいになっている。自分の意見をみんなの前で言うということ自体に壁を感じているので、その上でルールを守りなさいというものをかぶせており二重にかぶせ手しまった結果、みなの方が重い。(福澤先生)

→論証のルールを守りながら議論するのはしんどいが、学部は制約があってしんどいもの。日本の先生の本を読んでいると、あまりしんどい思いをしていないのではないか、つまり理論になっていない。思いつきで言っているものが続いていって、やわらかい英語に直そうと思っても、どうしてこのパラグラフの後ろにこのパラグラフがあるのだろうといった状態である。一流と言われている先生の論文でもそうである。それがいいとか悪いとかではないが、サンデル先生の講義の元となったロールズの『正義論』についても、パラグラフごとに議論を重ねているが、我々が読むと20ページくらいでプツッと切れてしまう。一番最初に何を言っていたのかわからなくなる。その翻訳のしおりにもしどうしてこんな面倒くさい議論をするのだろうと翻訳者が書いている。もしかしたら翻訳者もわかっていないのかもしれない。先生が言うようなきっちりした議論をあきらめているのかもしれない。『論語』のように日本や中国の伝統として、見開き1ページ程度で話しが完結する。根拠と論拠を示して結論を導くようなことは、一冊の本になるくらい理論が必要ないのではないか。教えるほうができていないので、そのような教育法はできそうにない。議論が強い人が育っても後継されない。先生のようにヨーロッパ的な作法のできる人を育てるほうがいいのか、アドホック的に感覚だけで感じていくような授業をするほうが効果的なのか。どうしたらいいだろうか。(野村先生)

→言語技術教育に出てくるような、初等教育から基礎をやろうというような動きは、少しあるが、簡単にはいかない。世界のうちの *one of them* としての日本を活性化していくとすると、使い分けが必要なのでは。要するに日本のやり方そのものが他で通用しないのは事実であり、日本全体が不利益を被ることもあるのではないか。だから、簡単にそこはあきらめないほうがいいのかと思う。従来の感覚的な方法を補強するかはさておき、それは生き延びるのではないか。私が主張しているものは大学からでは遅いという感覚があり、下のほうに降りていかなきゃいけないとっていて、降りようと思っ

れたまま大学に入る。それを一回蘇らせようとしても全然蘇らない。タイミングを逸していると思う。本来、議論のルールなどは後付けで教えなくても自然に覚えるはずのもの。たとえば高校の教員などが議論のルールなどを少しずつ教えていくなど、初等教育なりのやり方があるはずなのに、そういうことをしないでいきなり大学で教える。非常に後追いの感じになっていて苦勞する割には中々成果が出ない。しかしこれはあきらめられないので、初等教育のほうに降りていくことも含めて考えなくてはならない。

・三森ゆりかさんの言語教育の薦め

ご自身がお立ち上げになった、つくば言語教育技術研究所の所長をされており、そこで言語技術教育を地域で教えている。大学の附属高校の先生が興味を持ち、中学・高校のカリキュラムの目玉に。三森さんを講師としてよび、言語技術科をつくった。小学校くらいからやらせるととてもいい。ヨーロッパだと幼稚園から大学院まで下からずっとやられている教育。(福澤先生)

・言語技術教育は非常にヨーロッパ的、合理的だと思うが、911 テロ以降文化の対立が見られる。この言語技術的な文化を推し進めることがそのような対立が究極的にはあり得るのではないか。あくまで話をするベースとしてはこのような技術が大切なのだという、全体的に融合的に進めていく必要があるのではないだろうか。(大澤先生)

→論証とか議論とか言うと堅い印象がするが、分かり合うための方法の一つとしていいのではないかと思う。歩み寄るときのコミュニケーション・ツールとして使えないかなということがベースにある。ネゴシエーションや、大澤先生のおっしゃるような文化圏の違うところでのコミュニケーション・スタイルが違っていると、たとえば主張はするけども根拠を経験的事実で出せということがピンと来ないと。そうではなくてそこがいきなり論拠になっている。要するに、技術ではなくて心情などが支えている。だからトゥールミンのモデルでいうと、根拠の部分が出せないし出す意味もないと考えている可能性がある。(福澤先生)

→そこで難しいのが、神への冒瀆というタームが出てきてしまって、それ以上先に進めない状況でどうするのかということ。いま私はある地域の問題について対立している人々の間の対話のミディエーションをやっている。その究極の議論をしていくと、そのような自然に対する冒瀆であるとかが出てくる可能性がある。その先のすり合わせをすることができるのかどうか一つの課題になってくる気がする。そこはどのように進めていけばいいのであろうか。日本国内でさえそのような問題が起きている。辛抱強くブレイクダウンができるのではないかという希望を持ちつつ、でもどこまでできるだろうという不安も感じている。(大澤先生)

→冒涇という意味はわかるが、それを主張している人はそこで終わっている気がする。ある種の精神論のようなもので支えられているわけだが、そのレベルで戦ってもどうしようもない。冒涇というものが何から構成されていて、その人の心理が何から構成されているかということを知解できないければブレイクダウンが利く可能性はあると思う。(福澤先生)

→言語教育の取り組みが一部の学校に限られているとそれで終わってしまう。反対に文科省が学習指導要領に言語教育を入れると、教える人が理解せずやってしまうので、言語教育が面白くなくなってしまう。議論はうるさいばかりでちっとも面白くないと反対の方向へ向いてしまう。福澤先生が行って教えられるのと学習指導要領に基づいて自分がそもそも議論とか論証について考えていなかった人が教えなければいけない状況になるのかというのは教育効果が全然違う。どのように進めるか戦略が必要。(野村先生)

→自分で理解できないものに振り回されるのではなく、活字になったものも場合によっては十分に批判対象であるということを理解しないと、学問をエンジョイできない。大体ゴールデンウィーク明けで見切りを付けてしまう。(福澤先生)

→ロースクールでもモードとしては同じ。判例が言っていることをそのまま覚える。それを駆使して何かを生み出していくことや批判的に見ることがない。(大澤先生)

→いまの学生には「これはこうだ」という強迫観念があり、何か変だと思える学生が減ってきている。本当の意味で問題意識のある学生は挫折して阪大や早稲田大には入ってこられないのかもしれない。(野村先生)

→野村先生がメールでおっしゃっていたが、知識はあるけど問題意識のない学生か、問題意識はあるのだけど手段としての知識が全然ない学生、この組み合わせを相手にしないといけない。素地のある学生は大学受験に受からないのかもしれない。(福澤先生)

→こういう基本的な枠組みを駆使して自分でブレイクスルーしていく力がリーダーシップだと思うのだが、そのベースになるという位置づけだと思う。(大澤先生)

・総長セッションでの学生

GLP で育ってきている学生がいるが、総長セッションを開いたときに痛切に感じたのは、自己主張はできるようになったがその根拠、よりどころになっている心情などに関しては言わない。次の人の話に対し自己主張を重ねる。本質的なところを突くいい発言があつて

も、全く違うところに進んでいく。正当な議論ができない。これは教員でも同じ。議論ではなく自己主張で終わっている。学生に議論などさせられないのではないか。(木川田先生)

→主張の筋道を重視すべきで、主張の正しさの評価は必要ないと学部学生には言っている。(福澤先生)

・聞くと必ず答えなければならないという意識

人に質問されると、わからないことについてもその場で取り繕って答えを出そうとするが、正直にわからないと答えることが質問者の誠意に応えているときがある。整理できないまま、とりあえず何か応対し、議論した気分になっている。(福澤先生)

### 3.GLEA の活動について

#### ◆報告

- ・総会・理事会の開催

### 4.研究会規約の改正

- ・4条3項について承認

### 5.今後の活動について

- ・エグゼクティブ・セミナー共催？につき承認

企業のトップになりうる人を集めてセミナーを行う

- ・福澤先生と木川田先生による『熱血先生』の出版

→福澤先生・木川田先生・大澤先生・野村先生の間で相談

- ・研究会主催で木川田先生に学生相手のワークショップをして頂き、教員に見学してもらう

#### ・次回会合テーマ案

今迄に上がっている案：大阪大学大学院法学研究科の教授である河田先生に政治理論についてご教授頂く。河田教授は投票行動の研究等をされている。政治学者は政治家の伝記を通じて政治家がどのような考え方をしていたのか等につき研究を行うが、次回会合において河田教授にはリーダーが備えるべき教養等につきお話しいただく。

→日程は決定しなかったため、調整が必要

## 6. その他

平井先生より、学生・大学院生とのインタビューでのファシリテーターの募集。  
現時点で学生に意見を聞く仕組みがないため、すぐにも始めたいとのこと。  
→ロースクール修了生などにも優秀な学生がいるので活用すべき(野村先生)